ある知識人の肖像

——竹浪先生に寄せる比較文化論的随想——

文学部　赤　瀬　雅　子

1960年代半ばのことであったかと思う。フランス留学から帰って，また早稲田の大学院にもどった私は，まだいわゆるフランスぼけがなおらず，無意識のうちに肩をすくめて驚いたというしぐさをしたり，つつましすぎる日本食に茫然としたりしていた。こんな帰り新参の私にも，机を並べて稲垣達郎先生の日本近代文学の講義を聴く仲間ができた。ポーランドのワルシャワ大学日本研究所から派遣された研究者で，ミコワイ・メラノヴィッチさんという，石川淳の専門家であった。現代作家には珍しく和漢洋の学に通じ，フランス最先端の小説の方法論に通じ，難解な文章を書くこの知的無頼派の作家が分るとはと，驚きと尊敬の目でこの人を見つめたものである。しかしそれから長い間つい連絡もせずにいた。このメラノヴィッチさんが帰国後も研鑽を積まれ，そこから派遣されていた日本研究所の所長に就任されたという消息を伝えて下さったのが竹浪先生であった。

こんなことがはじめで，竹浪先生はときどき私にロシアのことやポーランドのこと，またそれらの国の文学の話をして下さるようになった。私が留学中，嫌というほど見せつけられたヨーロッパの伝統や礼儀は，ヨーロッパの美の核心である。竹浪先生によれば，東欧には革命を経てなお宮廷風の礼儀が遺っていて，大学の学長の女性の先生に対する態度などは優雅そのものだということである。東欧の旧い大学のあるいくつかの都市に思いを馳せながら，そんな御話しをうかがった。

それからしばらくして，竹浪先生は本郷の学生時代，語学の天才といわれていたという話を耳にした。その話はしごく当然のことと思われた。十九世

紀の東欧のシックな階層の人々が，フランス語に磨きをかけるためにパリに行ったりまた戻ったりを繰り返していた時代の雰囲気をよく御存知であったからである。本場モスクワのチェーホフ劇の中にちょっと割り込んで登場して，フランス礼讃の言葉をつつましやかに述べる大学教授などという役割も，竹浪先生には似合っている。

話は一転するが，現在もっとも権威があるとされている日本近代文学館編の『日本近代文学大事典』に，紅野敏郎執筆の項目「鳴海完造」がある。内容をところどころ拾うと，「露文学者。昭和2年モスクワに赴き11年まで滞在。レニングラード東洋学院日本語講師などし，その間，中条百合子，湯浅芳子と交わる。ソビエト滞在中よりプーシキンをはじめとする多くのロシア文学者の著書を系統的に蒐集，のち池田健太郎は「プーシキン学に精通した碩学」と称揚，その良質の蔵書とともに浩瀚な学殖ある人として再評価した。」とある。戦後の混乱期，鳴海完造がソビエトから苦労して持ち帰ったプーシキンの初版本の数々を見せられた池田健太郎が息を呑んだという挿話もある。

竹浪先生は鳴海完造の甥に当たられる。完璧に近くプーシキンの本が蒐集されたので，これからはじめて日本のプーシキン研究は本格的になるのですよと，いつのことであったか，述べておられた。書誌のことを自然にこれだけ重く考えることのできる学者は日本にはまだ少ない。ごく普通にいわれたことではあったが，私には感銘深い言葉であった。また外国語の発音を，口や唇の形から入って本格的に身につけるようにするのがよいという考えも，鳴海完造譲りのものであろう。

この度，竹浪先生が退職なさる理由は直接うかがったわけではないが，一日も早く書斎の人になりたいという，唯それだけのことであろうと拝察する。本学も同僚も学生もいとおしく御思いでいらっしゃることはもちろんなのであるが，読書と執筆に明け暮れる魅力はそれらに替え難い。

エセイストでいらっしゃるので，読者としては，また新しい旅行記も期待したい。春まだ浅い頃，地中海沿いのどこか旧い街でふとおめにかかって，ロシアやポーランドから出て南欧を旅した作家や詩人のことをうかがってみ

たい気がする。